

旭堂南龍／咲くやこの花インタビューvol.22

旭堂南龍(きょくどう・なんりゅう)【令和元年度 大衆芸能部門[講談]】



釈台を張り扇で叩いて調子をつけながら、豊臣秀吉ら時の天下人の一代記や合戦の舞台裏をドラマチックに物語る、講談。折しも東の天才こと神田松之丞の6代目神田伯山襲名に沸く2020年、一躍ブーム到来の兆しです。好機とばかりに西で気を吐くのが講談師の旭堂南龍さん。2018年、上方では27年ぶりとなる真打ち昇進。アイドル並みの人気を誇った明治時代の講談師・藤井南龍から名を継いだ、次代の担い手です。古典への探求心はそのままに、柔軟な発想と抜群の行動力で、伝統芸能を現代に脈打たせるべく尽力中。「伯山さんと同じ誕生日なんです」と奇しくも同じ星の下に生まれた“西のホープ”に、講談との出会いとこれからについて伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「漫才師になりたいくて、芸能文化科のある高校に進みました」

受賞おめでとうございます。師匠の旭堂南左衛門さんには、一番にご報告されたそうですね。

「ああ、よかったな」と言って頂きました。獲っておめでとうは、その日だけ。賞は励みになりますが、ここから色んなことが広がっていくので、油断できない気持ちです。

幼少期から芸事にご興味が？

小学校に上がる前のことで覚えているのは、日曜日に母親が好きだった松竹新喜劇のテレビを一緒に見たことですね。何故か母親が泣き笑い。これは何だろうと、訳も分からず印象に残っていたのが藤山寛美先生の姿でした。大人になってから気づくんですけど、三枚目の役を演じた上で、核心つくようなことを言うじゃないですか、すごいなと。



「咲くやこの花賞」は“昭和の喜劇王”と称された藤山寛美さんの寄付がきっかけで創設されました。

寛美先生がCMに出演した際、「多大なギャラはいただけませんので、寄付させていただきます」と言うてできた賞なんですよ。うちの師匠にも「大阪のための賞やから」と言うて頂いて、僕のなかで点と点が繋がりました。

その後は、芸能文化科のある東住吉高校へ進学されます。

当時は漫才師になりたいくて、芸能文化科に入りました。1年生のある日、落語家の林家染丸師匠が講師でいらっしやり、目の前で落語をやって下さったことがあったんです。確か「延陽伯(えんようはく)」。台本読みながらでしたけど、それがめっちゃ面白かった。2年生にあがる頃には、漫才を目当てに見ていたテレビ番組「ABC お笑い新人グランプリ」で桂吉弥兄さんの落語「時うどん」に笑いました。ただうどんを食べるだけの噺やのに、なんでこんなに面白いんやろと。気づいたら高3まで、落語ばかりしてました(笑)。

漫才師から落語家へ、進路変更されたんですね。

ところが、その頃には「僕この世界に向いてない」と思うようになってたんです。芸能文化科の生徒ってみんな個性が強くて、とてもこんな人らの中では生きていかれへんと。大学も普通の大学にしよう先生に相談したら「無理や」と。普通の高校生が数学、物理やってる時に、お前らは三味線、落語を習ってたのに、カリキュラムが足りるわけないやろと。



それでも一念発起して、自宅で1年間の浪人生活を始めます。

“宅浪”なんかして受かるわけがないと、他の浪人生からめっちゃバカにされましたよ。でも予備校に通ってたら行き来の時間ももったいない。朝5時から昼まで勉強して、昼過ぎから夜までバイトして、また深夜に復習するという生活を続けました。そんなある日、テレビで「今日はセンター試験です」とニュースで流れたのを聞いて「あれ？センター試験？何で？」と。予備校行ってないから、その辺の情報が入って来てなかったんです(笑)

かくして私立を受験し、見事合格した近畿大学で「落語講談研究会」に入会されます。

入学して直後に正門前にズラーと並んだ体育会や文化会の新入生勧誘ボックス。長机とパイプ椅子と部の立て看板という質素な設えで。実は当初真っ先に向かったのが、体育会のボクシング部でした。「あしたのジョー」とか読んで好きだったので。ところが屈強な人ばかり。「あ、これは厳しそうや、やめとこ」と、そのまま90度方向転換した先に「文化会落語講談研究会」がありました。高校時代に落語が面白かったことを思い出し、勢いで「入会します」と。そのことを高校時代の友人に話すと「実は知り合いに噺家がいる」と紹介してくれたのが当時は桂春菜と名乗っていた、現在の桂春蝶兄さんでした。そこから何故か意気投合してよう遊びました。大学3年生の時、春菜兄さんに「噺家になりたいんです」と話したら「やめとき」と。噺家は人数多いし、食い合いになる。せやったら、講談師になったらどうやと言われて。



いよいよ講談との接点が。

それで思い出したのが、高校3年生の時に授業の一環で鑑賞した「東西の講談会」でした。とにかく面白くなかったんですよ(笑)。僕の知識がなかった事が原因なのですが。ところが一番最後に出てきた人は違った。うちの大師匠にあたる3代目旭堂南陵なんです。のんびりゆっくりと歩く姿にそれまで沈んでいた高校生たちが一瞬で心つかまれました。あの人、無事に高座まで辿り着けるのかなと。

そこ！

で、口演された「太閤記の長短槍試合」。それが爆笑でした。講談はすっかり忘れてましたが、最後の人は面白かったなという記憶が、春菜兄さんの一言でふわっと蘇ったんです。

サークル名にも「落語講談研究会」と、講談の文字が入ってますね。

それも後から知ったんですが、近畿大学の初代総長、世耕弘一先生が「これからの若者には伝統文化を教えなあかん」と、2代目旭堂南陵に相談に行ったそうなんです。そこで「わしも歳やから、せがれに任せ」と、3代目旭堂南陵と3代目桂米之助師匠の2人に託されたのが部の始まりでした。



いろんな所にご縁の芽があったのですね。

とはいえ高3で南陵先生を見て以来、講談のプロの高座は見ていなかった。早速探して寄席に見に行きました。

そこで後に師匠となる、旭堂南左衛門さんの高座に衝撃を受けられた。演目が怪談「お紺殺し」。



人を殺める場面があるんですが、その芝居が真に迫っていた。これがもう細かい描写で、聴きながら、「この演者は何処かで同じ事した経験あるんちゃうかな(笑)」と思うくらい。じゃないと、あそこまでのリアリティは出せない。「講談てすごいな！」と、我を忘れて食い入るように見てました。パンフレットに旭堂南左衛門とあったので、この人に弟子入りしようと決めて、大学を卒業したその日に、師匠の家の前で待たせて貰いました。

それが 2014 年 3 月 19 日。寒空の下、夕方 15 時から 22 時頃まで待ち続けました。

22 時頃トイレに行きたくなったので、コンビニで済ますか、その間に戻ってきたらどうしようと悩んでいたら、マンションの暗がりに格好の植え込みを見つけた。いざ支度に取り掛かろうとした時、師匠の姿が見えたので「弟子にしてください」と植え込みから飛び出したら、師匠に「うわー！」とびっくりされました(笑)。



愉快なのが、そのまま酒場に移動して、乾杯と共に入門を許されたとか。

「君は呑めるか？」と聞かれ、ここは下戸やけど「はい！」やろと答えて。近くの焼き鳥屋で生ビールで乾杯して、師匠がぐーっと一口呑んで「じゃあ、今日から弟子入りで」とおっしゃったんです。

そんなことがあるんですね。

僕も「なんでなんですか!?!」と聞いてしまいました(笑)。師匠が言うには、自分はいつも午前 2、3 時まで呑んで家の裏から帰るけど、今日はなぜか 22 時頃に家の表から帰らなアカンと思ったと。なんやあのマンションの暗がりに志のある若者があって、「弟子にしてください」と出て来たら、「今日は弟子にするな」と思ってたら、ほんまに僕が飛び出してきた。これはもう縁のもんやからと。翌日「青雲の志を持つ講談師になりなさい」と、旭堂南青の名前を頂きました。

「アカンと思ったら、いつも引き上げてくれる力が働く」

講談の演目は歴史ものと決まっていますか？

基本は歴史を語ります。まずは膨大にある古典で型を身に付けて、そこから新しいものにも挑戦する。講談という素材をどう料理するかは、演者の才覚次第です。



コメディでもサスペンスでも味付けは自由だと。

そうですね。ネタ稽古で教わることはシンプルで、「真髓を聞いたかったら本番の芸を聞きに来なさい。そうすれば、どういう風に料理しているかが分かるから」というのが、上方の講談における特徴じゃないですかね。常に気を張って、自分から見聞きして勉強しておかなアカン。東京はわりとズバツと教えてくれるけど、そうするとそれ以上工夫しなくなる。教わったのが権威のある人であればあるほど、その人の“倣い”になって、みんなが同じようにやってしまう。その点、上方は教えと違う演出も受け入れて貰えます。理由を聞いて、「それやったらこうした方がええわ」とか、議論の余地がある。例えば、咲くやの贈呈式で披露した

「光秀の祝言」。あれは色々資料をあたっていた時、「光秀は優しい人で、奥さんの面体が崩れていても夫婦になった」という一文を見つけて、これをドラマチックにできないかと作ったもの。歴史と辻褃が合うように考えました。



史実を基に、大いなるフィクションでも良いですね。

講談は「こうあって欲しい」という夢のある嘘ですね。映像が立体的に浮かび上がるような、優れた小説とも言えるんじゃないですかね。昔の話の型を学んで、それを現代に置き換えた例では、出身の近畿大学のマグロ誕生秘話を語る「近大マグロ物語」。実際に白浜の研究所まで取材に行つて、なるべく専門的な用語は省きつつ、物語を拵えました。

また、さまざまな伝統芸能の若手が集う「霜(そう)の会」の活動も活発ですね。

「これからは上方の伝統芸の世界は若い人たちが手を携えたらええやろうね」と、春蝶兄さんの発案です。最初は僕と能楽師の林本大さん、今村哲朗さん、浪曲師の京山幸太さんの4人で食事会から始めました。ある晩、伝統芸能の世界に多い、「痔」の話でめっちゃ盛り上がったことがあって。「これは下(しも)の会ですね」と、グループラインができた。そこから茶道、文楽、日舞と仲間が増えるにつれ、「下(しも)」じゃマズイから「霜(しも)」にしようとして途中で変えて。踏まれても立ち上がる霜のように頑張るという意気込みを込めました。最後に「しも」という音がアカンから「そう」と読むことにして、晴れて「霜の会」が旗揚げされました。本来の意味を知っているのは4人だけです(笑)。



プチ暴露、ありがとうございます(笑)。霜の会では 2020 年も年明け早々、「ゴジラ」とのコラボ企画が実現しました。

「霜乃会」がお世話になっている阪急交通社さんからの相談で、映画館の動員数を増やす為に何か出来ませんかねと依頼を受けて落語家の桂紋四郎さんがすぐに企画書と台本の草案を作ってくれて、東宝株式会社やOS株式会社も協力頂いて、円谷英二の物語を講談の旭堂南龍で、当時の市井の人々の話を桂紋四郎の落語でと決まった。映画の前に 2 人で 30 分ぐらい、なぜ特撮が世の中に出て来たのかを講談で、その時人々の反応はこうやったというのを落語で聴いて頂いて「それではいよいよ、映画の『ゴジラ』をたっぷりとお楽しみください」と本編が始まる。「霜乃会」の繋がりがやからできることですね。

今後いろんな方面に可能性が広がりそうですね。

だからほんまにここから勝負なんです。講談はとくに、あまり世間に知られてないので。「やっぱり賞を獲るだけのことはあるな」と言われるくらい、勝負せんとアカンのです。

改めて、入門から約 15 年。どんな歩みでしたか。



最初はそれは悲惨でしたよ。今でも覚えてますけど、初年度の年収は4万円(笑)。それくらい講談会がなかった。当時は若かったから、夜中までずっとバイトして朝方ちよつと寝て師匠の用事やら講談会や寄席の手伝い行く等出来ました。3年目に上方落語の定席「天満天神繁昌亭」が出来た時は、羨ましかった。同期の桂三四郎君が楽屋番でした、色々な演者さんに覚えて貰って、落語会の前座に呼ばれるようになるという日がずっと続いて、家にも帰れない。そこで「他に誰かおらんか」と聞かれた三四郎君が「講談師なんですけど」と僕を紹介してくれた。そこから僕も講談師なんですけど落語会の前座が続いてアルバイトを辞めなイカンぐらい仕事が舞い込んだんです。ほんまにアカンと思ったら、いつも引き上げてくれる何かの力が働く。そんな感じでした。

ご両親はずっと応援を？

そうですね。実家は自営業で、親父は金型プレスの職人です。自分にしか作れない金型とかもあるんで、それを企業が買いに来たりする。僕がこの世界入る時も親父は「ええんちゃうか」と。紆余曲折あるけど俺もそうやってきたから、自分でやりたいと思ったことを始める方がええと思うと言ってくれました。

心意気は受け継がれているようですね。

年季明けて3年目の時、「繁昌亭」ができて仕事一本で食っていけるようになったので、父親に報告しに行ったことがあるんです。「アルバイトを辞めました」と。親父には「お互いやってることは違うけど根本は同じ。お金にならんとした仕事も侮ったらアカン」と言われました。



お父様も当時の南龍さんと同じ、26歳で独立されたそうですね。

10代で九州から出てきて今の仕事に就いて、最初は不器用やし毎日怒られながらやってたと。お金にならん仕事を回されることもあったけど、10年続けたことで、そこから誰にも負けない技術を身に付けた。親父は着実に堅実にやって来て、製造業が一番しわ寄せを食らったバブル崩壊の時も、うちは大丈夫やった。バブルでええ思いもしてない分、悪いことも起きなかった。そんなこともあり、金にならん仕事も侮るなど。一生懸命やったら必ずお金になる仕事として自分に返ってくるからと、教わりました。

最後に、南龍さんが思い描く未来とは。



僕、野村克也監督みたいな講談師になりたいんですよ。分析に分析を重ねた上で、人を育てるのが上手かった。若い頃は華やかな王、長嶋の陰に隠れてしまうんですけど、歳を重ねるほどに人柄の良さが出て来て、弟子もどんどん育っていく。面白いこと言ったら、それに弟子が返してくれたりしてね。そんな師匠になりたいなど。後続の芽を潰すことなく、自然の流れに身を任せる。歳重ねると無理も利かなくなりますし、それはすごく意識します。最終目標はやっぱり、人間国宝ですね。みんな可能性はありますし、芸人続ける以上は夢ですね。

★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……



此花区にある講談の定席「此花千鳥亭」です。オープンは2019年1月3日、定員は約40名。じつはDIYでできた小屋なんです。旭堂小南陵姉さんが襲名した時、当時の桂文枝師匠から「僕ら噺家は天満天神繁昌亭を作ったけど、講談も寄席を作らなアカんで」と言われたのがきっかけ。なければ作ったらええねんと。小南陵姉さんが地域の商店街に丁度良い広さの場所を見つけて。そこから防塵マスクを買って。僕も最初知ってますけど、ようあそこまで仕上げたなど。ネット環境も整ってるし、プロジェクターもあって何でもできる。年末には、同じDIYで作った東京の「梶原いろは亭」とネット中継を繋いで、生放送で寄席を開きました。“城”を稼働させるため、僕か小南陵姉さんのどちらかは出演して、ほぼ毎日講談が聴ける。上方講談の聖地にするため、身体張ってます。有難い事に此花千鳥亭に来たお客様から「此花千鳥亭は海外公演しないんですか？」と言われ軽い気持ちで「じゃあ連れて行って下さい(笑)」と言ったら「分かりました、連れて行きます！」と実現することになりました。相棒の“マイ釈台”を背負って、近々フランスに行ってきます。

【旭堂南龍 公式サイト】 <https://nanseint.wixsite.com/nansei>

【此花千鳥亭】 <https://asobigjimdoofree.com/>